

Title	Millennium, Jahrtausendの譯語について： 濱田耕作氏譯ミハエリス氏美術考古學發見史と小林秀雄氏著希臘古代文化史を散見して
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.4 (1928. 12) ,p.159(625)- 162(628)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281200-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Millennium, Jahrtausend の譯語について

——濱田耕作氏譯ミハエリス氏美術考古學發見史と

小林秀雄氏著希臘古代文化史を散見して——

私共西洋史の學徒が常に當面しつゝある研究上の障礙は、事物の眞相について研究を初めるに方り、先づ語學上の困難に遭遇することである。もちろん國史東洋史の研究に於ても、その究極に於ては同一の困難に遭遇するのであるが、その初步的のものに於ては難易が同一の比ではなく、私共は後者よりも、より多くの不利益を忍ばなければならぬ。之がために私共は今なほ本邦に於ては西洋史研究の少年時代にあることを自白して深く遺憾とすると同時に大に奮勵する所がなくてはならない。この點からして私は西洋史に關する著述研究はもちろん、外人の著述、資料集等の邦譯も續々出版せられて、その事物に對する具體的知識

と趣味の普及を圖ると共に、一步々々史學研究その物の進歩に資する所がありたいと思ふ。幸にして近時西洋史に關する若干の良書が出版せられた。そのギリシャ方面に關するものについて見るに原隨園氏譯アリストテレス原著アテナイ人の國家、同氏著ギリシャ史研究、濱田耕作氏譯ミハエリス氏美術考古學發見史並に小林秀雄氏著希臘古代文化史等是である。

私は後の二書を散見した際に、Millennium, Jahrtausend, (Millénaire)の邦語について何とか工夫がないものであらうかとの感を抱かせられたので、この短文を草することとした。

大英百科辭典第十三版の「ミレニアム」の項を開

いて見ると、それには『ミニアム』とはラテン語の *mille* (千) と *annus* (年) から *biennum*, *triennum* になぞらへて作つた新ラテン語 (pseudo-Latin) であつて、文字通りに言へば一千年の時期である。

この語は特に一千年内にキリストが再現して地上を統治すると信ぜられたその期間に用ゐられる云々とあつて、他の多くの辭書もこの意味の説明を載せてゐる。私のこゝに言はんとするのは、何等宗教上の意義なき時の區分としての用法であつて、そは近時上古史研究の發達につれて一般的の用法となりつゝあるものである。之に相當する獨語である『ヤールタウゼンド』は、マイヤーの大辭典の新版にもまだ見えない様である。從來から百年の區分に用ゐてゐる *Jahrhundert* (世紀) から *Vierteljahrhundert* (四半世紀) *Jahrzehnt* (十年紀)などを派生した様に、西暦紀元前の年代の中に於ては、その後に於けるが如き精密なる時の區分をなし難くまた時にはその必要もなれ長い時代に對して、世紀よりも更に長い時の區分である『ミニアム』或は『ヤールタウゼンド』が用ゐられだ

したのである。例へば小林氏の著述の主たる臺本となつた(同書序文二頁)ベロホのギリシャ史(註二)はもちろん、近刊のエム・ロストフチエフの古代史(註三)の如き盛んにこの語を使用してゐる。然らばその譯語は本邦に於て如何に使用せられてゐるのであらうか。

濱田博士の名譯、上記の發見史に於ては『千年代』といふ語が頻りに用ゐられてゐる。之を例示せんに、

『南歐に於ける青銅時代は、大體に於いて、耶蘇紀元前二千年代に屬するのであつて、後段述べんとするミケーネ若くはエーゲ美術の產物は、即ち此の時期に入る可きものに他ならない。(二六七頁)

『要するにハルスター文化は、西暦紀元前、最後の二千年代の初半に屬するものであつて、丁度希臘美術發達の初期數百年間に相當する。』

私は不幸にしてミハエリスの原著も英譯も手許に持合はせてゐないので、果して濱田博士が『ヤ

「ルタウゼンド」の譯語として『千年代』の語を使用せられたのであるかどうかを知らないけれども、史實の上からしてさうであらうと察せられる。原著を持たないことのために史實からの類推を左に試みることとする。

私共が八十年代 (eighties) 九十年代 (nineties) などの用語を使用するときには通例前者は八十年から八十九年まで、後者は九年から九十九年迄をさすのである。この用法に従へば、博士の紀元前二千年代は前一〇〇〇年から前二九九九年をなすことになる。しかるにミケーネ全盛時代は大體西暦前一六〇〇年頃からと見てよいのであるから (註三) 博士の二千年代は『ヤールタウゼンド』をさすことになる。更にハルスタット時代といふのは諸説 (註四) があるにしてもケルト人のヨーロッパに於ては最高前一〇〇〇年から最低前五〇〇年までの間をさすのであるから、博士の用法での紀元前一千年代の初半といふのに合致する。さうして特に『最後の』なる限定句が冠してあるのによつて他の解釋を許さないまでに博士の譯語が明かと

なつて来る。果してこの通りであるならば、たとひ博士に於ては確信のある用語法であるにしても前記八十年代の慣用法のあるために他の誤解を招くの虞れがないでない。

次に小林氏は前記の立派な著述に於て、既に紀元前十一世紀にクレタ島には象形文字 (所謂ピクトグラフ) があつて、之が此世紀の半頃に野線文字 (リニヤール) に發達し、……(四、五頁)

と記されてゐるが、同氏の據られたベロホのギリシャ史第一巻第一部一一頁には、*Bereits um den Aufang des II. Jahrtausends* とある。かゝる内容の豊富なる著述に於ては私共の常に犯し易い『ケーリス・ミステーク』によつてローマ數字の二をアラビヤ數字の十一と見誤られ、史實の上から何の氣なしに『ヤールタウゼンド』を世紀と見誤られたのであらうかとも察せられるけれども、次の句に於て此世紀の半頃にとあるのは、著者の意では紀元前第十一世紀の半頃をさすことになるので、之はたとひ著述に於ても他の傍證がなけれ

ば少しく無理である。原著に於ての眞の意味は、私の用法では、既に紀元前二千年紀の初にクレタ島には一種の象形文字が存し、次じやんの二千年紀の中葉までに (Vor der Mitte dieses Jahrtausends) 既ち紀元前千五百年頃にそれよりして點線文字が發達したのではなくては困る。また、『紀元前二千年の半頃ギリシャ(?)に於てベビュリヤの楔形文字及びヒタの象形文字が流行し紀元前一千年の終頃に……』(1回〇頁)。

「あるふれども原著では In Syrien herrschte um die Mitte des II. Jahrtausends v. Chr., die babylonische Keilschrift, daneben die chetitische Bilderschrift. Gegen Ende des Jahrtausends... (Beloch, Bd. I. S. 224.) ふなりふるふるのべある。今度せ「」を「」と誤讀せらるふはなかつたけれども、此は常に「ケルタカヤンド」の譯語に苦しまれてゐるかの如くに見える。

私はこれを、在來の『十年紀』『百年紀』『半紀』等の用語法に準じて、單に『千年紀』と譯するとの必ずしも不可ではあるまじかと思ふので

あるが、それは兎に角、考古學に於ても古代史に於ても重要な時代別の尺度であり、西洋史のイロハたる『ムニアム』或は『ヤールタウゼンド』の譯語につきも、一つは『我國に於ける考古學界第一人たる』(註五) 京都帝國大學の濱田教授により、他は近時本邦史學界に活躍せんとする立教大學の、小林教授によつて、それへ區々に使用せられてゐるのを見て、本邦西洋史學界の前途なほ遼遠たるを思ふ。

終に莅み好著譯を出された兩教授に對して私は深く敬意を表するふるのやある。(1918. 11. 11)

註 I K. J. Beloch: Griechische Geschichte, 2te. neuge-

stalte Aufl. Bd. I. 1924.

註 II M. Rostovtzeff (J. D. Duff 著): A History of the Ancient World. vol. I. 1926.

註 III G. Glotz: La civilisation égéeenne, 1923. p. 31. の表を見よ。

註 IV British Museum; Guide to Early Iron Age Antiquities, 2nd. ed., 1925. P. xii. の表を見よ。

註五 歷史地理第十九卷二八六頁。